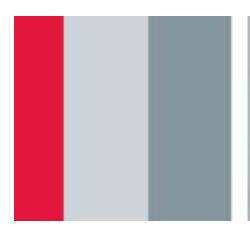
## MIPIの規格動向と測定ソリューション





テクトロニクス・イノベーション・フォーラム2011 宮崎 強

www.tektronix.com/ja



## 内容

- はじめに (MIPI® 技術の概要)
- MIPI D-PHYの概要
- MIPI D-PHY測定ソリューション
- M-PHYの概要
- MIPI M-PHY測定ソリューション



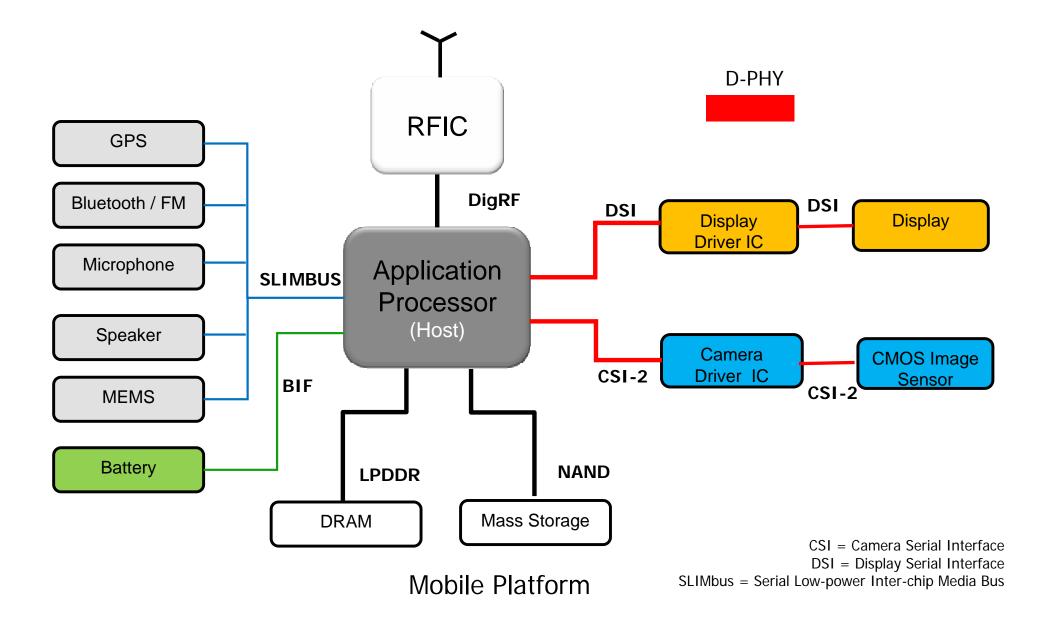
## はじめに MIPI®技術の概要



- MIPI AllianceはMobile Industry Processor Interface Allianceを意味する
- モバイル機器内のプロセッサとペリフェラルのインタフェースのシンプル化とその普及を目指したアライアンス
- MIPI規格では、プロセッサとカメラ、ディスプレイ、RF、GPS、オーディオ等とのインタフェースを規定
- 特にMIPI D-PHY規格ではカメラやディスプレイとのインタフェースの物理層を規定
  - ディスプレイとのインタフェース・プロトコルはDSI規格(Display Serial Interface)にて規定
  - カメラとのインタフェース・プロトコルはCSI-2規格(Camera Serial Interface-2)にて規定
- MIPI M-PHY規格ではRFやフラッシュ・メモリとのインタフェースも視野に 入れた物理層を規定
  - プロトコルはDigRF、UniPro、UFS、LLIなど
- TektronixはMIPI AllianceのContributorメンバー

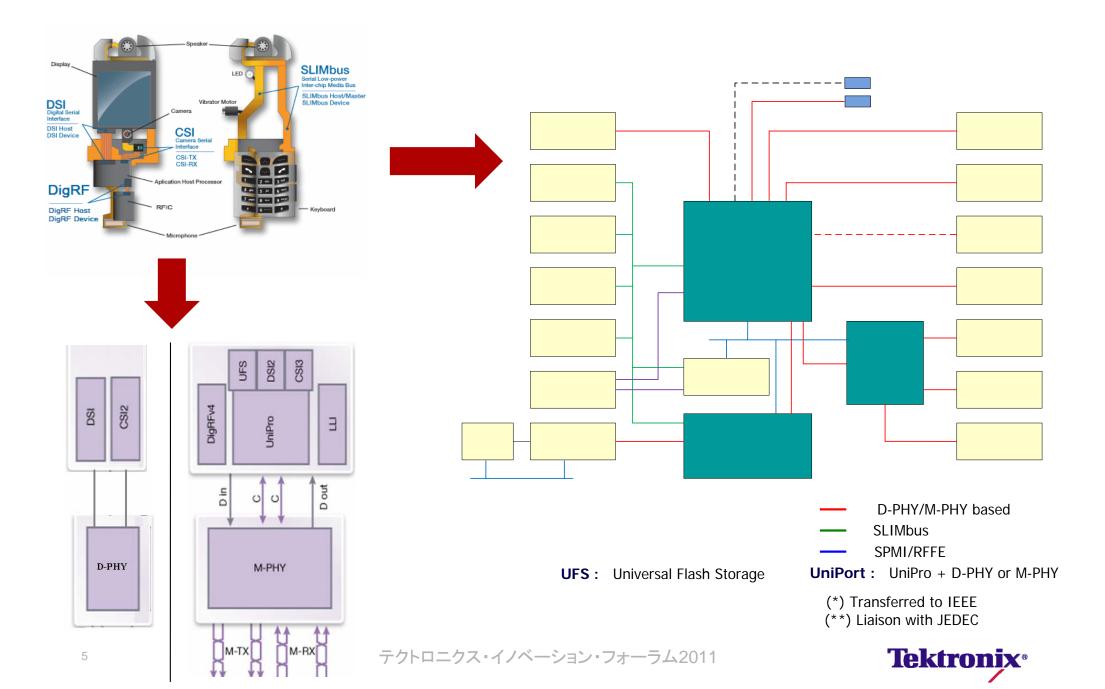


#### MIPI D-PHY



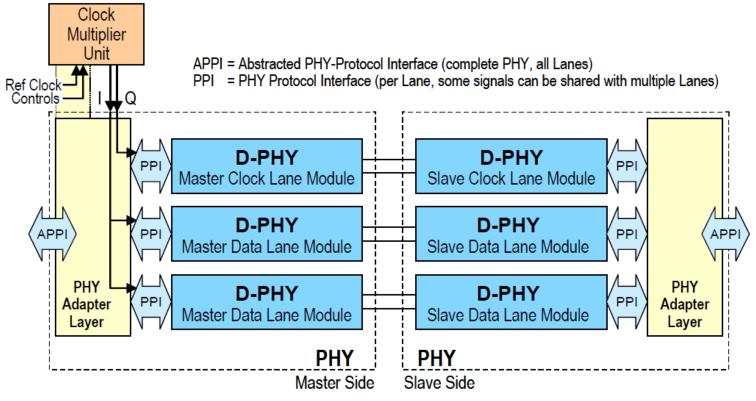


# MIPI の概要 次世代モバイル・プラットフォームの例



#### 1. MIPI D-PHYの概要

- MIPI D-PHYは、電気仕様を定めた物理レイヤで、その上位に Display Serial Interface(DSI)やCamera Serial Interface(CSI-2) などのプロトコルが位置する。
- クロック 1レーン + 1レーン以上のデータ・レーン

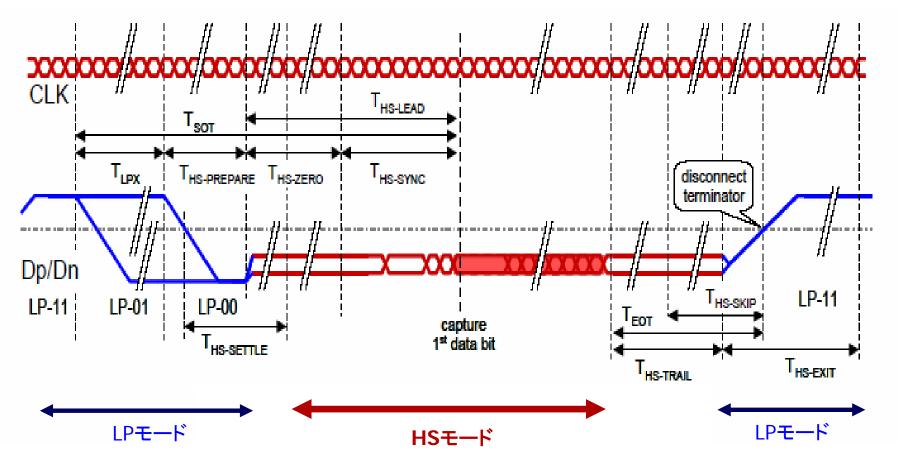


2Data Lane PHYの構成例



## MIPI D-PHY概要

- クロックとデータによる伝送でクロックはDDR動作
- 2つの伝送モード、Low Powerモード(LP)とHigh Speedモード(HS)がある



#### MIPI D-PHY概要

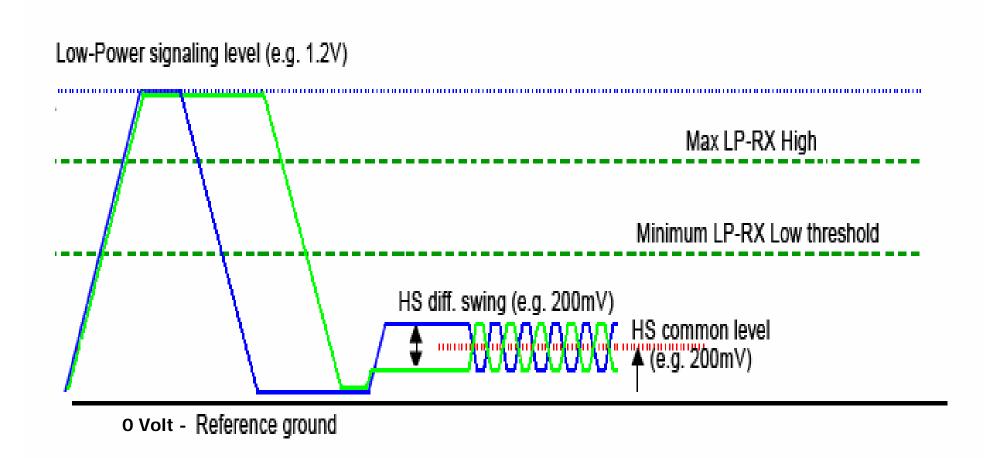
- 最大4データ・レーン + 1クロック・レーンによる伝送
- 各レーンの最大データ・レート
  - HSモードは80 Mbps ~ 1Gbps
  - LPモードは10 Mbps以下(主にコマンドの伝送用だがデータ伝送もあり)
- HS信号のTr/Tf(20-80%立上り時間/立下り時間)は最小150psと規定
- 信号方式は、HSとLPの各モードで異なる
  - HSモードはLVDSでCを介してGNDに50Ω終端(差動100Ω)
  - LPモードは終端抵抗無しのシングルエンド動作
- 双方向伝送または片方向伝送

最近の高分解能ディスプレイや高分解能カメラの採用により 4Dataレーン+ 1Clockレーン構成の採用が増えています。 また、HSモードで1Gbps超、LPモードで10Mbps超の検討もされています。 将来の高分解能化に向けた模索が行われています。



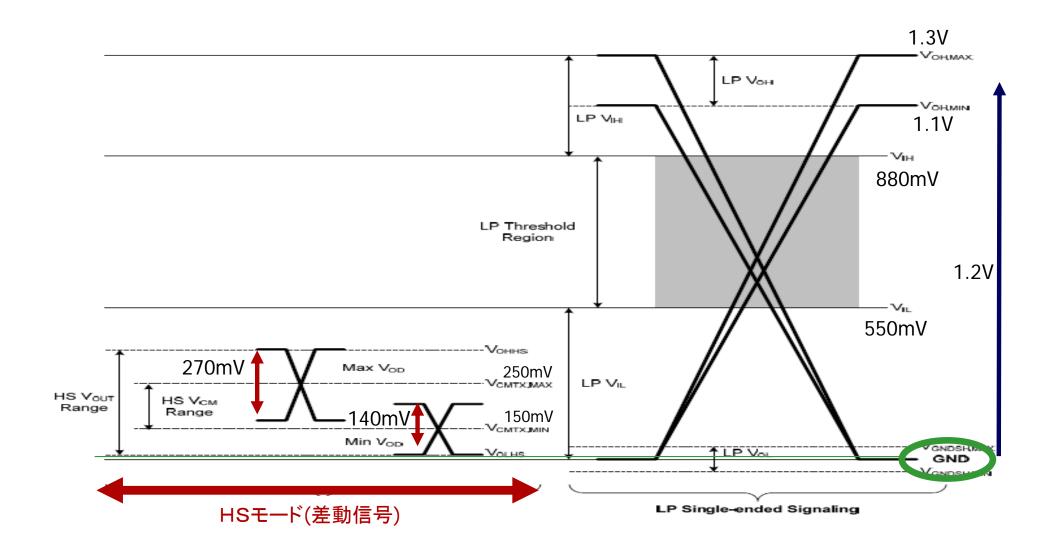
## MIPI D-PHY概要

#### HSモードとLPモードがダイナミックに遷移



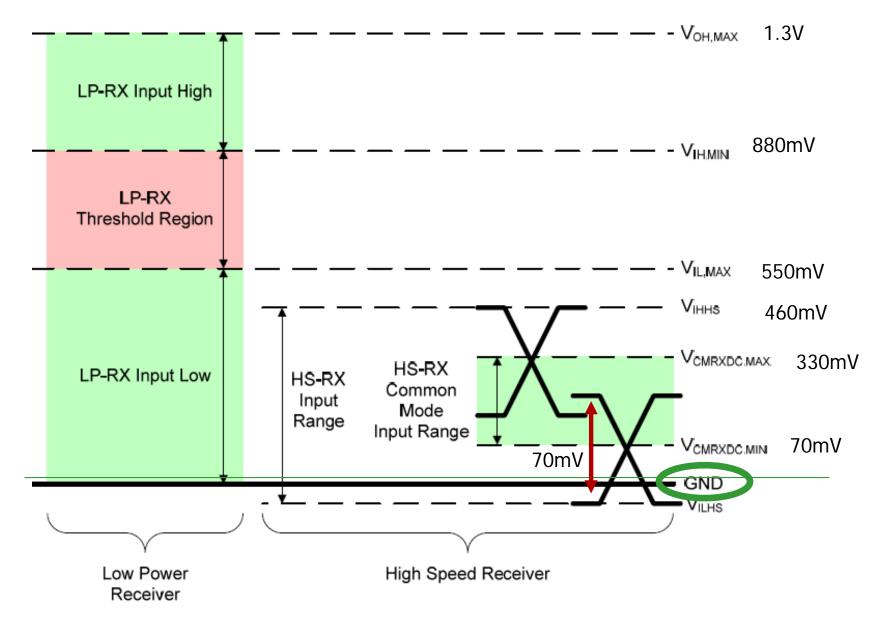


## D-PHY Tx信号レベル



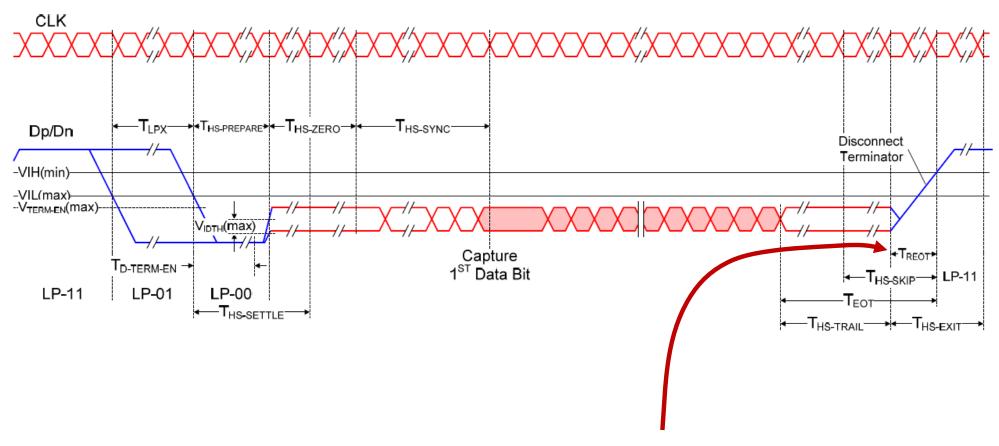


## D-PHY Rx信号レベル





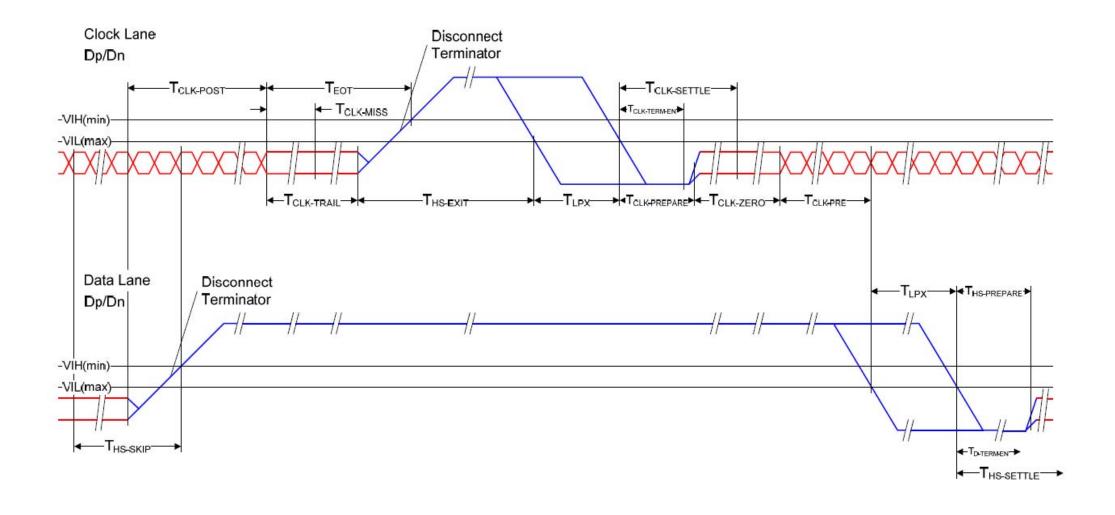
## Tx Data Lane の HS/LP遷移タイミング



TREOT (30% to 85% のTf/Tf)は35ns以下



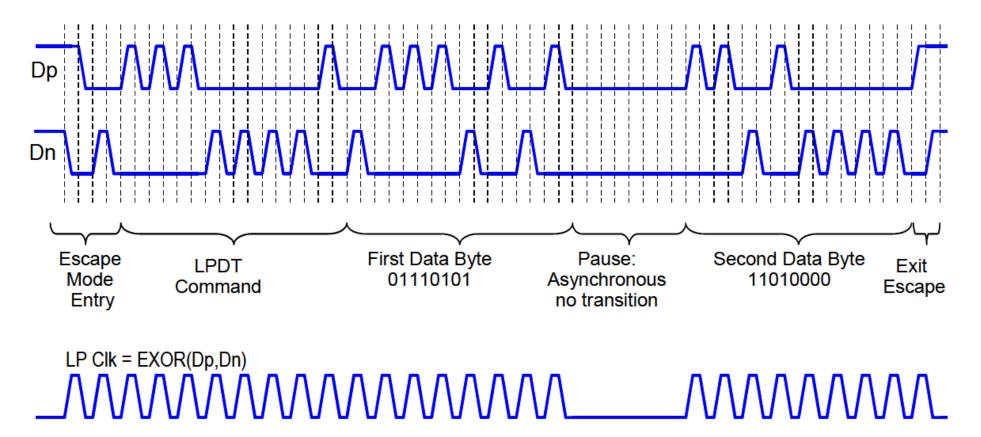
## Tx Clock Lane の HS/LP遷移タイミング





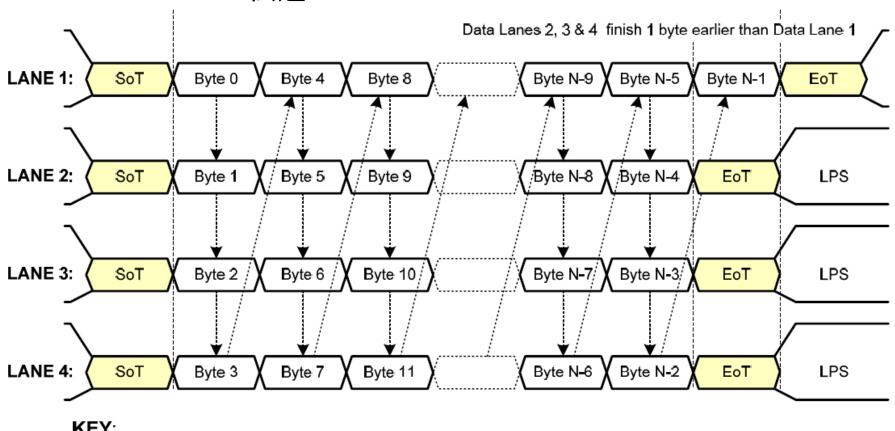
#### **LPDT**

- LPDT(Low Power Data Transmission)では、レシーバがDpとDnの EXORでクロックを再生
- TRLP/TFLP(Tx LP Dataの15% to 85% Tr/Tf)は25ns以下



## MIPI DSIの論理層

Multi Data Lane 伝送



KEY:

LPS - Low Power State

SoT – Start of Transmission

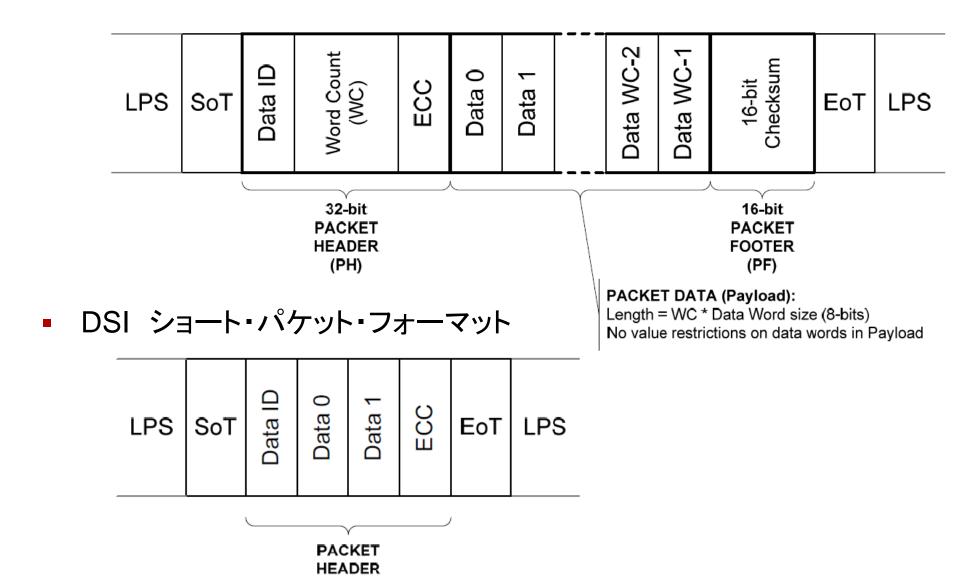
EoT – End of Transmission

4データ・レーン構成時の伝送



## MIPI DSIの論理層

■ DSI ロング・パケット・フォーマット



(PH)

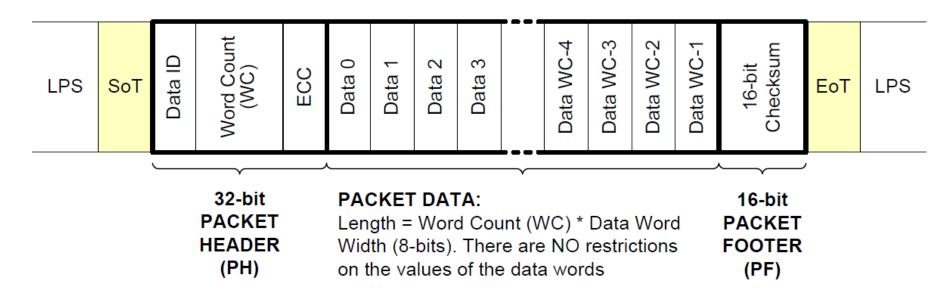
## MIPI DSIの論理層

複数パケットのHS伝送 (SOT) SP (EOT) LPS LPS LPS SOTX SPXEOT LgP Separate Transmissions LPS - Low Power State Short Packet SoT - Start of Transmission Long Packet LaP -EoT - End of Transmission LPSでは差動100Ω終端が 複数パケットの連続HS伝送 切り離され、低消費電力となる LPS LgP Single Transmission

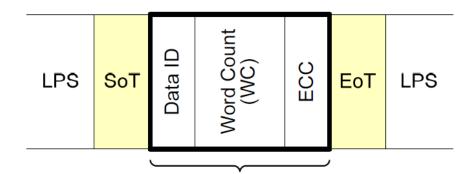


## MIPI CSI-2の論理層

CSI-2 ロング・パケット・フォーマット



CSI-2 ショート・パケット・フォーマット

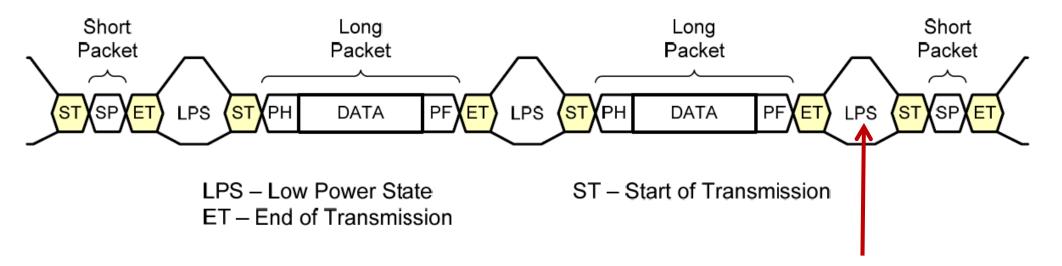


32-bit SHORT PACKET (SH) Data Type (DT) = 0x00 - 0x0F



## MIPI CSI-2の論理層

#### 複数パケットのHS伝送



LPSでは差動100Ω終端が 切り離され、低消費電力となる



## 2. MIPI D-PHY測定ソリューション 必要なオシロスコープの周波数帯域は?

- 高速デジタル信号は一般的に方形波
- 周波数領域で見ると、方形波は基本波と奇数高調波により構成
- 方形波の基本波周波数(最高)=ビット・レート(NRZ)/2例: 1Gbpsの場合500MHz
- 方形波では<u>5次高調波までの捕捉が目安</u>
  - 実際は立上り時間Tr(20-80%)がキー
    - 二一周波数(fKnee)\*=0.4/Tr
    - 3%誤差内での立上り時間測定には、 周波数帯域=1.4 × fKnee が目安



• 基本波:500MHz

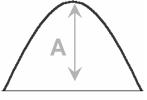
• 第3高調波 : 1.5GHz

• 第5高調波 : 2.5GHz

• fKnee=2.67GHz

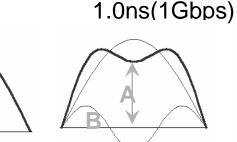
推奨周波数帯域=3.74GHz

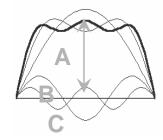
(5%測定確度ならfKnee × 1.2で 3.2GHz)

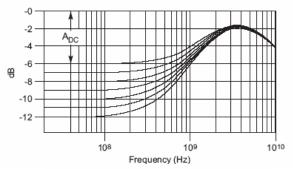


 $3\omega$ 

 $5\omega$ 







2.0ns (500MHz)

$$H(s) = \omega_{P2} \frac{s + \omega_{P1} * A_{DC}}{(s + \omega_{P1}) * (s + \omega_{P2})}$$

Tektronix<sup>®</sup>

ω<sub>P1</sub> = pole 1 = 2π\*2 GHz ω<sub>P2</sub> = pole 2 = 2π\*8 GHz A<sub>DC</sub> = dc gain

W

<sup>\*</sup>*高調波成分が急速に減衰する点。引用:* Howard Johnson and Martin Graham,「High-Speed Digital Design: A Handbook of Black Magic」, p.2. Prentice Hall, 1993

# 推奨オシロスコープ





DPO7000CシリーズとTDP3500型プローブ



DSA/DPO70000CシリーズとP7340A型プローブ

	機種名	周波数帯域	立ち上がり (20%-80%)	最大サンプリング・レート	プロ <b>ー</b> ブ・ インターフェース
	DSA/DPO72004C	20GHz	17ps	100GS/s@2チャンネル 50GS/s@4チャンネル	TekConnect
	DSA/DPO71604C	16GHz	21ps		
	DSA/DPO71254C	12.5GHz	23ps		
	DSA/DPO70804B	8GHz	33ps	25GS/s@4チャンネル	
	DSA/DPO70604C	6GHz	43ps		
•	DSA/DPO70404C	4GHz	65ps		
٠	DPO7354	3.5GHz	95ps	40GS/s@1チャンネル 20GS/s@2チャンネル 10GS/s@4チャンネル	
	DPO7254	2.5GHz	100ps		TekVPI
	DPO7104	1GHz	200ps		





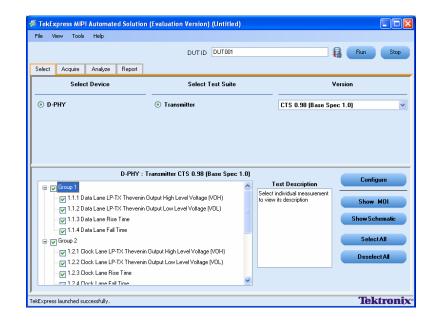
## Opt.D-PHYTX 規格適合性自動テスト



- Opt.D-PHYTX (D-PHY 自動測定機能)
  - D-PHY規格適合性を全自動測定
    - 使用にはTEKEXP(自動コンプライアンス・テスト・ソフトウェア TekExpress)が必要
  - DPO7000C, DPO/DSA/MSO70000Cシリーズのオプション

#### D-PHYTXの特長

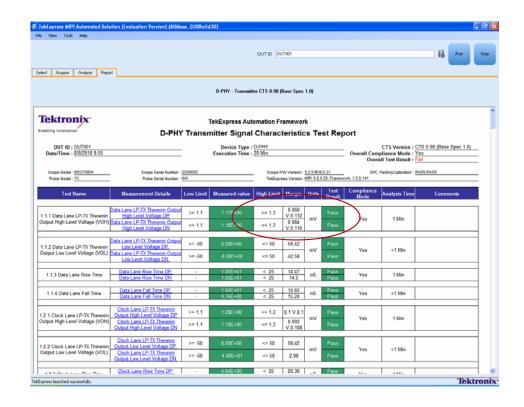
- カーソル設定、測定範囲指定も含め全自動
- 最新のD-PHY規格 (v1.0)に準拠
- 最新の CTS (v1.0)に適合
  - UNH Conformance Test Suiteに準拠
- ツリー構造による測定項目、測定グループ選択
- カスタム・リミット/ リミット値の編集(on the fly)
- テスト・レポート
  - 測定部分の波形イメージ
  - Pass/Fail サマリ(マージンの詳細付)
- 高精度テスト用最小構成は3.5GHz(DPO7354C)から可能





## D-PHYTX の測定結果レポート画面

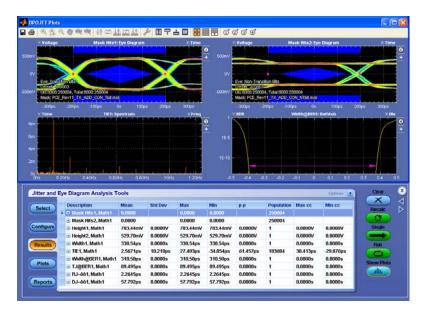
- 詳細なテスト・レポート
  - Pass/Failサマリ表
  - 各テストにおけるマージンの 詳細
  - 各テスト箇所の波形画面を リンク
  - 全レーンの全テストについて 統合レポート生成



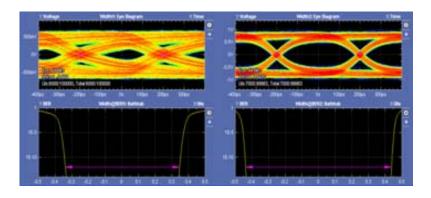


## 解析ソフトウェア DPOJET

- DPOJETジッタ&アイ・ダイアグラム解析 ソフトウェア
  - クロック・リカバリとアイ・ダイアグラム測定、 ジッタ/タイミング測定、周波数/周期、振幅、 各種タイミング測定
    - クロック、データ、クロックとデータ間
    - エンベデッド・クロックと外部クロックの両方に対応 (逓倍クロックにも対応)
    - 同時に99項目まで測定
  - アイ・ダイアグラム、ヒストグラム、スペクトラム、 バス・タブ、サイクル・トレンド・プロット表示
  - Arb Filterによるディエンベデッド波形の解析
  - 以前に保存した波形での測定も可能
  - Pass/Fail自動判定とレポート生成機能
- D-PHY Essential (Opt. DPHY)により MIPI D-PHY規格適合性試験が可能
  - D-PHY base spec に準拠
  - UNH Conformance Test Suiteに準拠



ジッタとアイダイアグラムの測定例



ソフトウェア・イコライズ前後の波形を用いた アイダイアグラムとバスタブ・カーブによるBER予測



# Test 8.1.5 – Data Lane HS TX Single-Ended Output High Voltage (VOHHS)





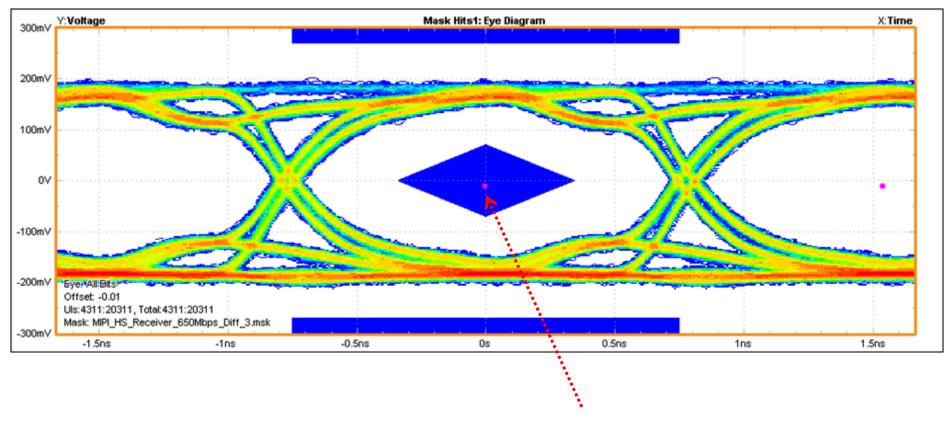
# Test 8.2.3 – Data Lane LP-TX Slew Rate vs. C–LOAD ( $\delta$ V/ $\delta$ tSR)





## MIPI D-PHY HS信号 マスクテストの例

■ 振幅、ジッタ、セットアップ時間、ホールド時間、立上り時間などの 仕様からマスクを作成し、マスクテストを行うことが可能







## MIPI D-PHY TX テスト用推奨機器 その1 規格適合自動テスト

- TEKEXP(自動コンプライアンス・テスト・ソフトウェア)
- Opt. D-PHYTX
  - D-PHYTX自動テスト・ソフトウェア
  - MIPI D-PHYの規格適合性、特性評価用ソフトウェア
  - 動作には、TEKEXPが必要
  - DPO7000C、DSA/DPO/MSO70000Cシリーズ上で動作



DPO7000Cシリーズ

- 推奨オシロスコープ: DPO7254C型以上
  - DPO7254C/DPO7354C型
  - DSA/DPO/MSO70000Cシリーズ

Rise Time 150psを±5%誤差以下で測定のためにはDPO7354C型以上推奨 ±3%誤差以下で測定のためにはDSA70404C型以上推奨

- 推奨プローブ
  - DPO7000Cシリーズ: TAP3500×4本またはTDP3500型×3本(または4本)
  - DSA/DPO/MSO70000Cシリーズ:

P7240×4本またはP73xx×3本(または4本)



# MIPI D-PHY TX テスト用推奨機器 その2 物理層の解析

- MIPI D-PHY Essentials (Opt. D-PHY)
  - D-PHYテスト用セットアップ・ライブラリおよびMOI
  - MIPI D-PHYの特性評価、デバッグ、コンプライアンス・テスト
  - テスト・レポートを自動生成
  - DPO7000(C)、DSA/DPO70000(B/C)、MSO70000(C)シリーズ上で動作
  - 動作にはDPOJET Advancedが必要 (Opt. DJA)
- 推奨オシロスコープ: DPO7254(C)型以上
  - DPO7254(C)/DPO7354(C)型
  - DSA/DPO70000(B/C)シリーズ
  - MSO70000(C)シリーズ

Rise Time 150psを±5%誤差以下で測定のためにはDPO7354C型以上推奨 ±3%誤差以下で測定のためにはDSA70404B/C型以上推奨

- 推奨プローブ
  - DPO7000Cシリーズ: TAP3500×4本またはTDP3500型×3本(または4本)
  - DSA/DPO70000(B/C)、MSO70000(C)シリーズ:

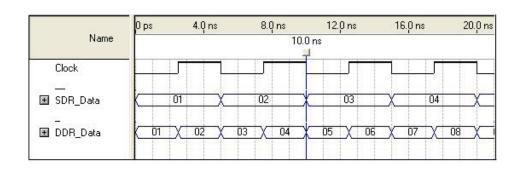
P7240×4本またはP73xx×3本(または4本)



## CSI2/DSI 信号発生 PG3A シリーズ・デジタル・パターン・ジェネレータ

	PG3AMOD	PG3ACAB	
最大クロック・レート	300 MHz (SDR) / 600MHz (DDR)		
出力チャンネル数	64 (SDR) / 32 (DDR)		
メモリ長	32M Vectors		
使用形態	TLA7000へのインストール	スタンドアローン・キャビネット	
アプリケーション専用のGUI	MIPI – DSI, MIPI - CSI		

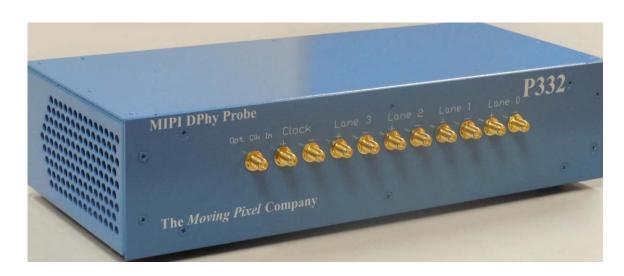






## P332型 MIPI DPhy 出力プローブ (PG3A用)

- MIPI D-PHY規格に準拠
- 業界唯一、4レーン同時出力をサポート: 1.5Gbps/レーン
- レーン毎に独立した遅延調整、信号レベル調整
- ビデオ、動画、オン・ザ・フライでのビデオへのコマンド挿入をサポート



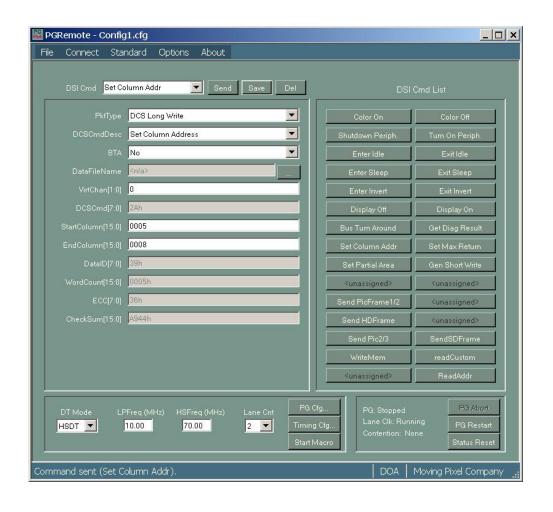
P332型 プローブ



## CSI2/DSI 信号発生ソフトウェア

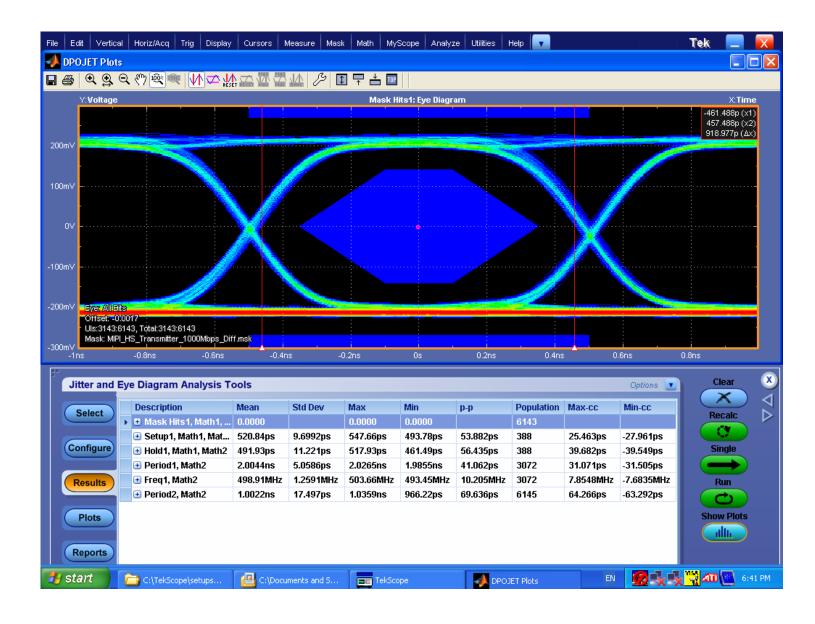
#### PGRemote-CSI-DSI

- ボタン操作により MIPI CSI2 または MIPI DSI信号を自動生成
- DSI V1.02もサポート
- ユーザによる0、1のベクタ設定は 不要
- カスタム・コマンド、マクロ、リモート・コントロール、オフライン・サポート
- TLAまたはPCのWindows上で動作
- ビットマップ画像ファイルからMIPI信号に自動変換可能





# PG3A + P332 MIPI DPhy プローブ のHS出力例





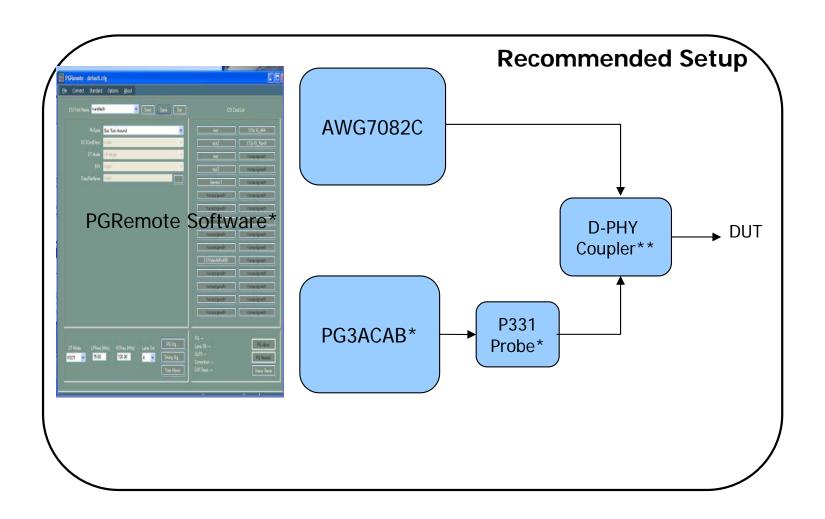
## CSI2/DSI 信号発生用推奨機器

- PG3ACAB A6型
  - キャビネット付デジタル・パターン・ジェネレータ (TLA7000で使用する場合は、PG3AMOD型)
  - P332型と組み合わせて1.5Gbpsまでサポート
- P332 A6型
  - MIPI D-PHY プローブ (PG3A用)
  - 1.5Gbps/レーン で4レーン同時出力をサポート
- PGRemote-CSI-DSI型
  - CSI2/DSI信号発生ソフトウェア
  - DSI V1.02 もサポート



## D-PHY Rx: テスト・ソリューション

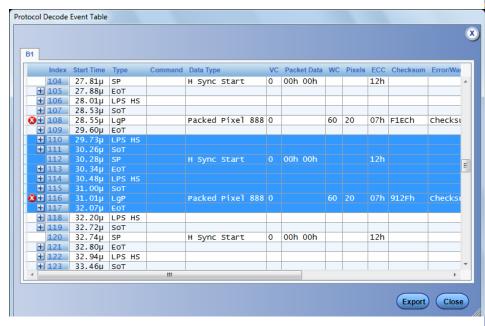
■ AWG7000Cシリーズにてノイズとジッタを付加





## プロトコル解析 オシロスコープによるDSI-1/CSI-2のデコード

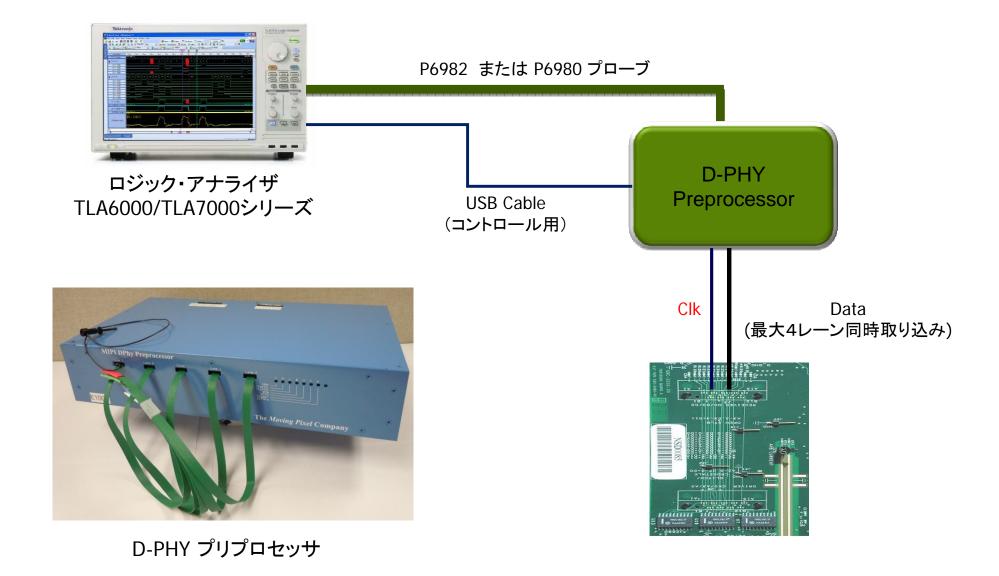
- バス・デコード表示トイベント・テーブル表示
  - Start of Transmission (SoT)
  - Data Type (Packed Pixel 888など)
  - Virtual Channel, Word Count
  - Pixel値(Red-255,Green-216,Blue-000など)
  - Checksum
  - End of Transmission (EoT)
  - 問題箇所のエラー/警告表示







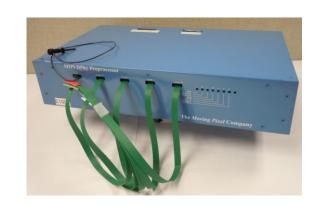
# プロトコル解析 ロジック・アナライザによるCSI-2/DSIのデコード





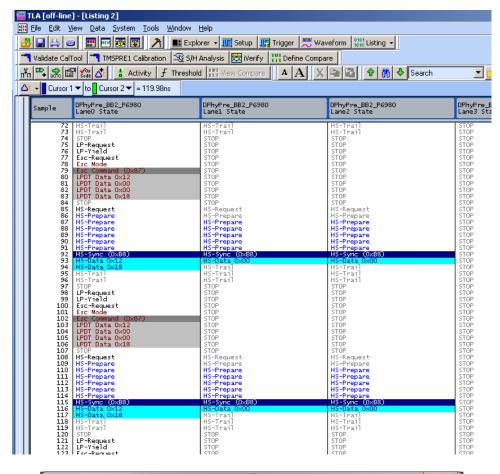
# D-PHY プリプロセッサ

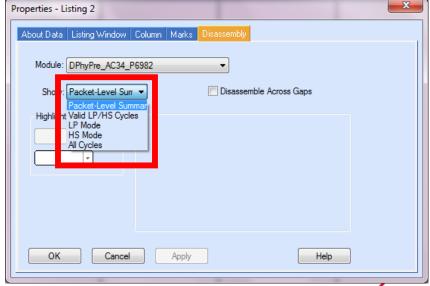
- 最大4レーン同時取り込み、各レーン1.5Gbps まで対応
- CSI-2/DSIプロトコルをデコード
- LPとHSデータを一括取り込み
- パケット・レベル・トリガ機能
- リアルタイム・フィルタリング
- レーン・アクティビティとエラー・ステータス表示
- ソルダイン・プローブ(カラーコード付き)
- 画像ファイル出力(保存)
- TLA6000シリーズ または TLA7000シリーズと組み合わせて使用



## D-PHY デコード

- 1 ~ 4 レーン D-PHY data
- デコード表示
  - LP コマンドとデータ
  - LP/HS遷移
  - DCSコマンド
  - DSIデータ・フォーマット (RGB888など)
  - CSIデータ・フォーマット (YUV420 10bit、RGB888など)
  - ECC/CRCエラー





## MIPI D-PHYプロトコル解析用推奨機器

## オシロスコープによるプロトコル解析

- DPO7000CシリーズまたはDPO/DSA/MSO70000Cシリーズ
  - Opt.SR-DPHY (DSI/CSI-2シリアル解析機能)
  - プローブ
    - TDP3500型、TAP3500型など(DPO7000C用)
    - P7340Aなど(DPO/DSA/MSO70000C用)

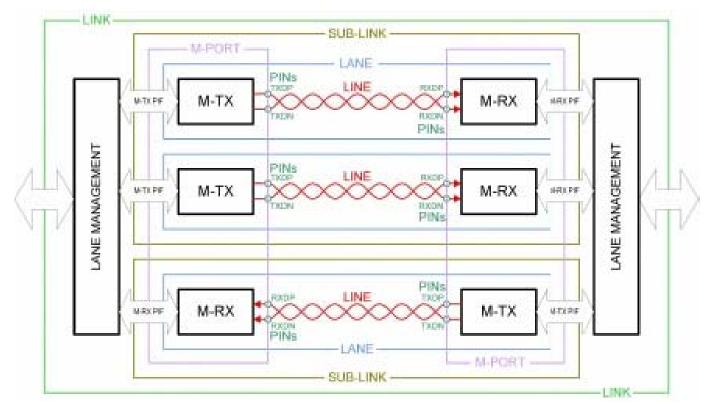
### ロジック・アナライザによるプロトコル解析

- TLA6202型
  - 68chロジック・アナライザ
  - P6982型 ×2本
    - ロジック・アナライザ用D-Maxプローブ
- DPHYPRE
  - D-PHYプリプロセッサおよびソフトウェア



## 3. M-PHYの概要

- 高速シリアル通信
  - M-PHY TxとM-PHY Rx 間の通信(dual-simplex)
  - 1レーンまたは複数レーンをサポート
  - 8b10b
  - CSI、DSI、UniPro、UFS、DigRF、LLIなどのプロトコル





# M-PHY のデータ・レート

- - 2つのシリーズ、A-seriesとB-series
  - それぞれ3つのGear、G1、G2、G3
  - 50Ω終端(差動100Ω)されている
- Low Speedモード
  - 2つのType、TYPE- I (PWM)、TYPE- II (SYS)
  - PWMには7つのGear
  - 差動100Ωまたは10kΩ以上

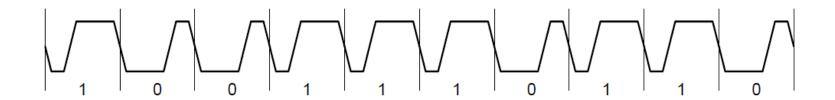
Signaling Mode	Max.Speed	Level (V)	Impedance
HS	5.83Gbps	200e-3/ 120e-3	50 ohms (差動100 ohm)
PWM	576Mbps	400e-3/ 240e-3	10k/50 ohms
(TYPE-I)		200e-3/ 120e-3	(差動100 ohm)
SYS	576Mbps	400e-3/ 240e-3	10k/50 ohms (差動100 ohm)
(TYPE-II)		200e-3/ 120e-3	

	Data rates					
		Gears	A (Gbps)	B (Gbps)		
	HS	G1	1.25	1.45		
		G2	2.5	2.91		
		G3	5	5.83		
	PWM	Gears	Min (Mb/s)	Max (Mb/s)		
		G0	0.01	3		
		G1	3	9		
		G2	6	18		
		G3	12	36		
		G4	24	72		
		G5	48	144		
		G6	96	288		
		G7	192	576		



# M-PHYのシグナリング

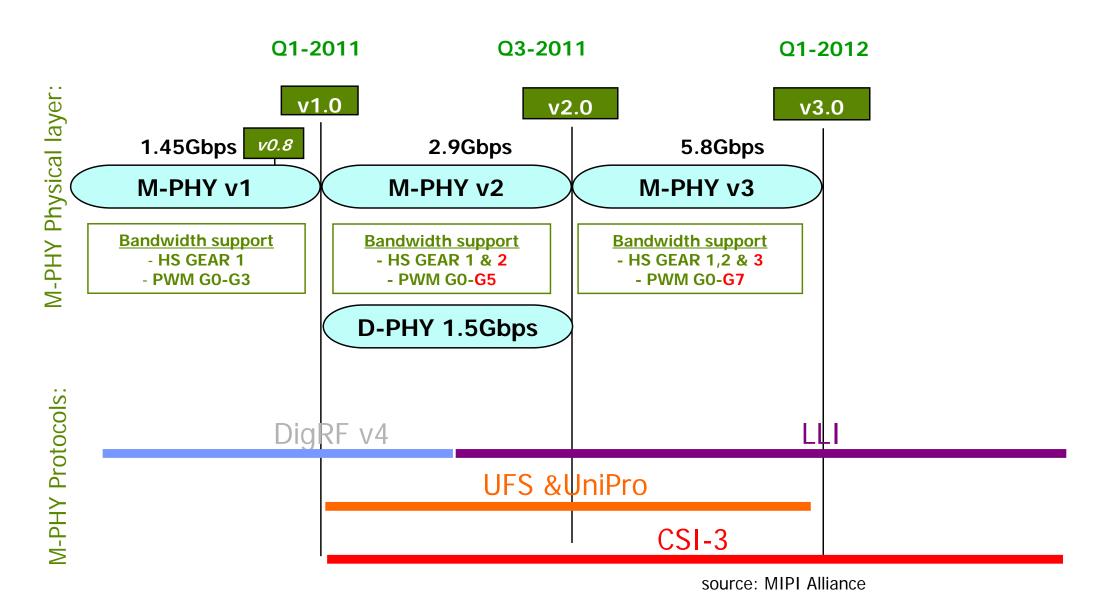
- HSモード
  - Embedded Clock
  - NRZ
- TYPE- I PWM



- TYPE-II SYS
  - Reference Clockを共有
  - NRZ



# M-PHY Technology のロードマップ



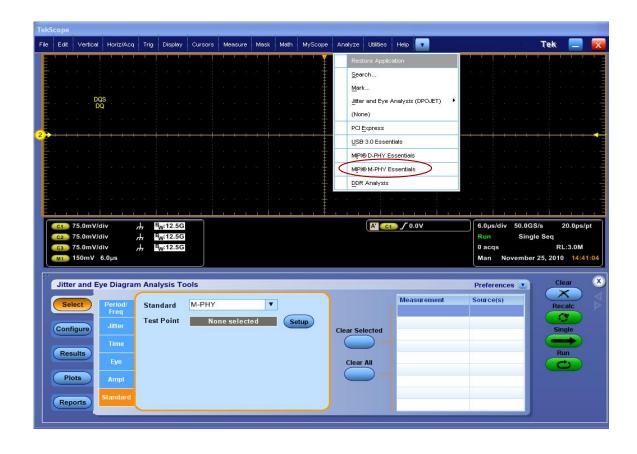
#### **UFS**

- UFS (Universal Flash Storage)
  - M-PHY物理層によるUnipro(Unified Protocol)とUFSを理想的なインタフェースとしてJEDECが承認
  - 2011年2月にJEDEC STANDARD JESD220としてUFS規格を公開
  - モバイル機器のストレージ・インタフェースとして普及が見込まれる



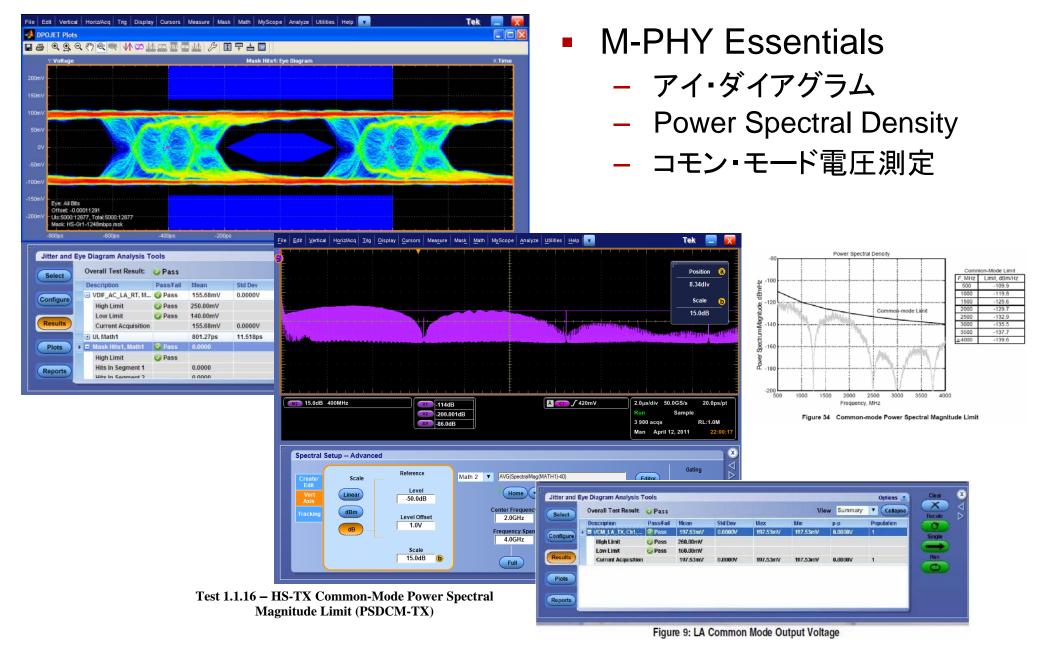
# 4. MIPI M-PHY測定ソリューション M-PHY Tx 物理層テスト

- M-PHY Essentials (Opt. M-PHY)
  - DPOJET用設定ライブラリ(DPOJET Advancedが必要)
  - 解析および規格適合性試験



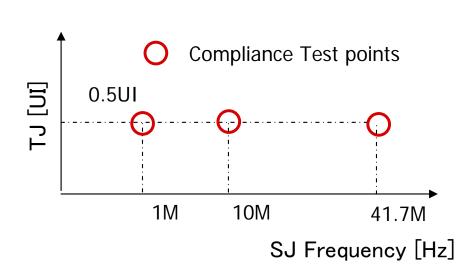


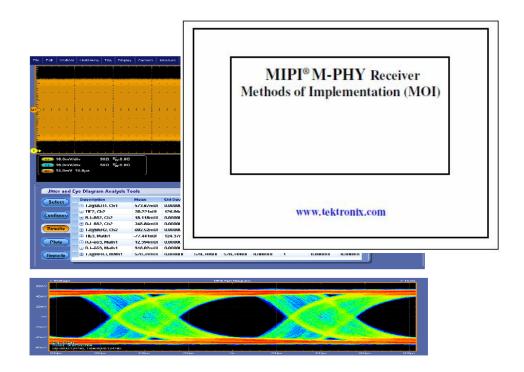
## M-PHY Essentialsによる測定例



## M-PHY Rx: ジッタ耐性テスト

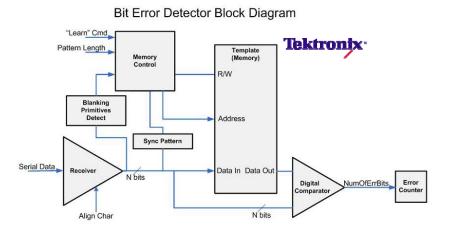
- Rx ジッタ耐性
- Rx アイ開口、差動入力振幅耐性
- コモン・モード入力耐性
- 入力パルス幅耐性



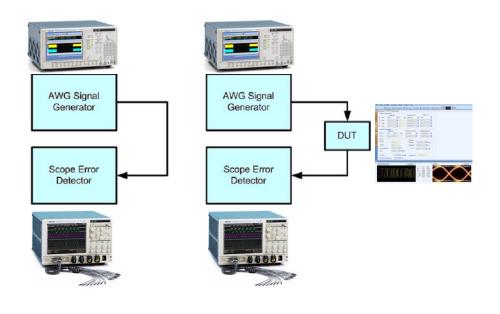


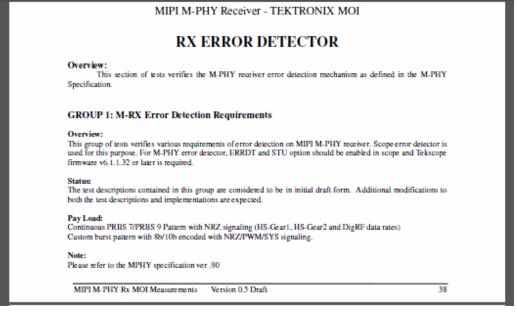


## M-PHY Rx:ビット・エラー検出テスト

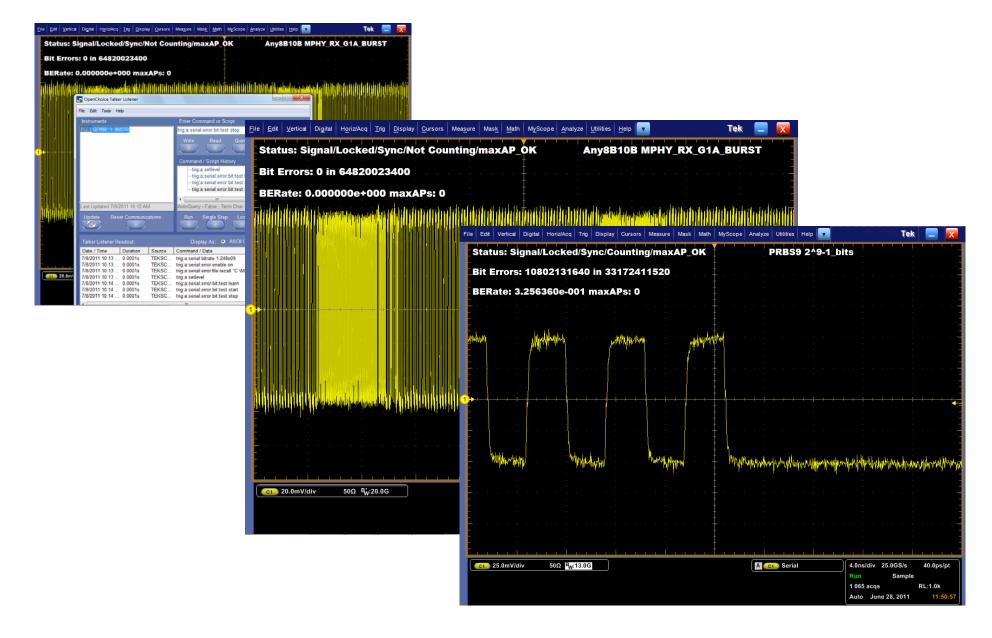


オシロスコープ内蔵 BER測定機能Opt.ERRDT





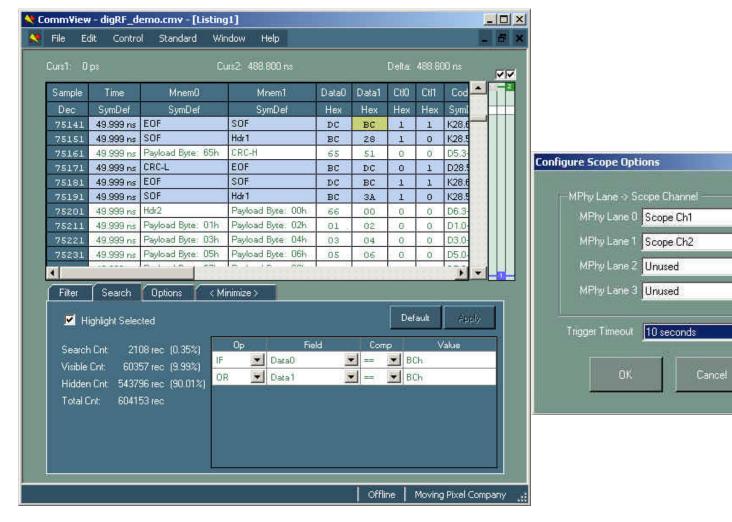
# M-PHY Rx: エラー検出テスト例





#### M-PHYVIEW

- DigRF v4 プロトコル・デコード
  - オシロスコープ上または外部PC上で動作





#### M-PHY Tx &Rx テスト用推奨機器

#### オシロスコープ

- HS-GEAR1: DPO7DSA70604C 型

- HS-GEAR2: DPO7DSA70804C 型

- HS-GEAR3: DPO7DSA72004C 型

#### プローブ

P73xxSMA×2本 またはP73xx型あるいはP75xx型 ×レーン数

#### Rxテスト用信号発生器

- HS-GEAR1 または HS-GEAR2: AWG7082/ AWG7102 以上

– HS-GEAR3: AWG7122C -06

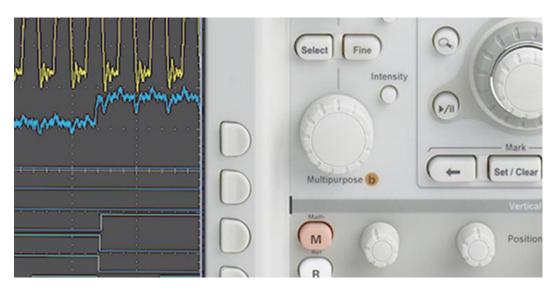
#### ソフトウェア

- Opt.M-PHY(DPOJET Advancedが必要)
- Opt.ERRDT (Scope Error Detector)
- Opt.SR-810B (8b-10b Decode)
- Opt.MPHYVIEW (DigRFv4 Protocol Decode)
- SerialXpress(AWG用カスタム・パターンを作成の場合)



# ありがとうございました。





本テキストの無断複製・転載を禁じますテクトロニクス社 Copyright Tektronix



